

## 7. 高度の皮膚症状を呈した **Recklinghausen** 病の 1例

(皮膚科) 細木 梅子・○橋本律子

62才の男子。昭和6年8月(当時25才)、Recklinghausen 病にて当科初診。諸種検査および腫瘤部切除を行なつたが、以来特別の治療を行なわず放置していた。昭和45年6月16日、全身皮膚に散在する大小無数の腫瘤と頸部腫瘍状隆起の疼痛を主訴として再び当科来訪、約4カ月間入院したので、40年前の病歴と比較しつつその経過などについて報告した。

追加：森崎直木(整形外科)10数年前当科で脊髄腫瘍の診断のもとに手術した患者で、術後大腿後面に疼痛性腫瘍を発生し、手術によつて坐骨神経より出た Neurofibromatosis の悪性変化と診断された例を追加した。なお本例は肺転移をおこして死亡した。

## 8. 人成長ホルモン測定における負荷方法の検討 (第二病院小児科)

○森川由紀子・村田 光範・大塚 睦子  
大坪 裕美・出口 敬子・草川 三治

現在、人成長ホルモン測定時の負荷方法は、インスリンによるものが最も正確でよいとされているが、小児科領域において、幼小児を対象とした場合、静注を必要とすること、負荷後の低血糖の危険性があること、(ことに一番測定を必要とする下垂体性小人症の場合はその危険性が大である) などから、日常のスクリーニングに使用するのは困難さが伴う。またその他の今まで使用されている負荷方法では、確率もよくなく、スクリーニングにはむかない。以上のことから、負荷方法が比較的簡単で、副作用も少なく、全検査時間も短かくてすむような方法があつたらと思ひ、ある施設の、成長発育において特記すべき異常の認められない3才～6才の体重13.2kg～27.6kgの子供を対象として、インスリン負荷、ブドウ糖負荷、グルカゴン負荷の三者を比較して検討してみた。その結果、有意の上昇をみたものは、インスリン負荷は10例中8例、ブドウ糖負荷は0、グルカゴン負荷は6例であつたので、グルカゴン負荷ができれば、負荷が筋注で良く、特別な副作用もないことから、好都合であると考え、同一症例について、負荷量と採血時間の再検討を行なつた。負荷量は、体重15kgまで0.25mg、15～30kg：0.5mg、30～50kg：0.75mg、50kg以上を1.0mgとして、採血時間は、負荷前と、負荷後90分、120分をとれば、100%反応値の上昇をみるのがわかり、スクリーニングとして、充分実用になると考えたので、応用した実測

値を加えて、報告した。

追加：草川 三治(第二病院小児科)ただ今演者の申しました通り、グルカゴンを用いてよいことがわかりましたので、現在先天性心疾患、小人症、その他について、更に三つの負荷方法を行なつて臨床的に検討を行なつてゐる。

### 第10回吉岡研究奨励全授与式 (pm3,00～4,00)

昭和46年度受賞者 千葉 智世(心研)  
山口 知子(生化学)

### 昭和45年度受賞者の研究発表

トキソプラズマ抗体の研究 横田和子(小児科)  
Behçet 病の免疫学的研究 小暮美津子(眼科)

## 9. トキソプラズマ抗体の研究

(小児科) 横田 和子

トキソプラズマ症の診断には、病原体を検出することが最も確実とされているが、診断の一助として間接赤血球凝集反応(IHA)が行なわれている。しかし、反応陽性でも臨床的に明らかな症状のないことが多く、診断はむつかしいことがある。本研究は、トキソプラズマ抗体の存在および抗体の所属する免疫グロブリン分画を決定するため、Radioimmuno-electrophoresis を用いて実験を行なつた。

純系マウス腹腔内に、トキソプラズマRH株を培養し、虫体成分を抽出し、それをDEAE-セルローズカラムクロマトグラフィーで分画した。その各分画について、これを抗原としてIHAを行ない、最も高い価を示す部分を<sup>125</sup>Iで標識し、寒天を支持体としてRadioimmuno-electrophoresisを行なつた。

IHA抗体価の高い成人において、症状のあつた例では、IgMに抗体が存在し、症状消失して、治癒したと思われる例では、IgGにのみ抗体が存在した。

IHA抗体価の高い母親と児の例では、IgMに抗体がある例、IgMとIgGの両方に抗体がある例、IgGのみに抗体がある例、または、どのIgにもない例があつた。母親にIgM抗体のみあつた例では、妊娠中にIHA抗体価が著しく上昇し、児は満期産低体重児(2,280g)なので、母体に感染があつたと考えられる。このように妊娠中のIHA抗体価の推移や、流産・早産、症状等から判定すると、母親にIgM抗体のある時は、トキソプラズマ感染が現在あることを示し、IgG抗体のみある時は、過去における感染の既往を示すものと考えられる。新生児のIgG抗体は、母親からの経胎盤移行であ